梅の難波―王仁の歌より梅の難波といふ
日まぜ―隔日
弓頭―弓の組頭
夜る・皺のよるにか・皺のよる
野出頭―えせ權門などの意か
留守云々―坂部の留守宅は城の表門の見張所
常場―狩の現場
どつさ草―混雜れかく

心中宵庚申

作者　近松門左衛門

上之卷

花のお江戸へ六十里、梅の難波へ六十里、百廿里の相の宿、都離れて遠江、濱松の一城主淺山殿の御在國。町屋々々の賑ひ商ひにたゆみなく、武士は弓馬に怠らず、日まぜ〳〵のお鷹狩、上一人の勵より、犬も油斷はならざりし。お家相傳の弓頭、坂部鄕左衛門、六十の皺の夜る晝なく、お側去ずの野出頭。今日も鷹野のお供にて、留守の屋敷は大手の見付、お鷹歸りの御入とて、晝常場より先案内。給人若黨お出入の町人迄、降て湧いたる忙しさ。御成座敷のかへ疊、床に掛物臺子の埃、掃いつ拭ふつ、お庭の掃除どつさ草引薄茶挽、茶道は引木にもまるよ。實誠忘れたりとよ門の盛砂、小者は帚にもまる。臺所の板本には、青物の淵魚鳥の山、獻立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人、こりや目出鯛を三枚におろし、山葵は八百屋が請取、南京の皿蒔繪の家具、善盡くしたる

引木云々！茶を挽くに忙がしもぢたー死んだ　三枚ー肉を三枚に分ける　二番ばへー二番息子　立かけ云々ー大通な髪の結立ちにて頭計り見事なり　壁に馬ー唐突の俚諺　手づつー不調法　心を盡させー氣を揉ませる　無下ないー無情

饗應なり。組下の二番ばへ、金田甚藏岡軍右衛門大橋逸平、打揃ふたる血氣ざかり。立かけのんこのあたまがち。裙はおるすの勝手見廻、「いづれも御苦勞〳〵。今日お鷹野より直お腰掛けらるゝとな。急なお成でさぞ取込。お料理組もふ出來たか、早し〳〵。我我も幸非番、用あらば遠慮無用」と挨拶口々。座敷口より小姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露うく前髪ざかり、する〳〵と立出、小「是は〳〵日比の御懇意、お揃ひなされての御出、主人郷左衛門嘸滿足。只今の殿樣前代と違ひ、何角に付て輕ひお身持、壁に馬乘かけし今日のお成。主人は御供我々が當惑、掃除等もそこ〳〵。書院の筆架かざり石、生花も手づつながら、間に合はするも奉公。御内見の上御直し下され」と、詞も風も出過ざる、若衆とぬか味噌の味は屋敷に極りし。金田甚藏、岡大橋、「何か〳〵、君のお手際僻事が有ふか。去ながら人に心を盡くさせ、無下ない心が一ッの疵」と、目面も明ぬ取込に、額で睨みつ袖引つ、手の中つまむも一むかし。古ひ仕掛が田舍なり。坂部郷左衛門衣服のきらも世につれて、戒むるとはなけれ共、上に從ふ木綿羽織に紺股引、鷹野出立のりゝしげに、すた〳〵と立歸り、「家來共掃除は出來たか。ヤアいづれもお見廻過分。いやさ〳〵年はよるまい物。岩松村岩水寺の門前よりお暇請、たつた一

一こぶし―今一息猶をなさるたまげ―吃驚

かりそめ―借るにかく

飛と思へ共、氣情も足も心計。去ながら殿には今一こぶし、遊ばし御入有ぞ、急く事はあらない。先お獻立を一見」と、長々と書付たる半讀さし、大きにたまげ、「こりやなんじや、殿の御膳は一汁三菜と先達て云越す所、三汁九菜の魚鳥づくし、身が身上を板本で切はたくか。此獻立は誰が指圖」と、以の外の不機嫌に、頭も光りちらかせり。小七郎しとやかに「憚ながら此義はお侍中の指圖ならず、二三日以前より、お長屋に逗留致し罷有、大坂の住人、敷油掛町八百屋半兵衛と申て、元は御當地遠州生れ、私とは腹がはりの兄。樣子有て五歲の時大坂へ立こへ、町人に奉公し、商人の養子と成、今の親は八百屋伊右衛門、實父山脇三左衛門は、私が生れし年相果、當年十七年親の墓への年忌まいり、私事も懇しく、召使はるゝ御主人へ、御禮も申たしと、逗留致せし兄半兵衛、商賣は八百屋殊更料理きゝ、幸と今日の御獻立を、致させし不調法は私。お目出度き折から、御機嫌を直され、兄へも御逢ひ下されかし」と、恐れ入たる謝罪に、主人の顏も打解くれば、少「是半兵衛殿能折のお目見へ。お獻立も仕直すため早う〳〵」と呼立る、聲を力に兄半兵衛、魂は武士なれど、三十余年町人に、業も姿もしみ付し、料理袴をかりそめに、御前といへば氣もおくれ、臺所の板敷けつま付やら滑るやら、は

ふ〳〵はい出で手をつかへ、半「お國の御家風も存ぜず、お獻立を致せしは無調法。先達てお使に、一汁三菜との御意なれ共、大坂藏屋敷留主居方の振廻でも、隨分輕いが二汁五菜。結構にはだん〳〵。朝鮮人の饗應御堂へも雇われ、七五三五々三、山影中納言の家の切かた、料理一通りは承り傳へしゆへ、申てもお大名の膳部、よもや一汁三菜とはお使の聞あやまりと、いばれぬ念を入過しは猶無調法。お好みの一汁三菜我らが手際で、きり〳〵しやんと切立焚立、鹽梅能の御機嫌よき御意を松茸、つけ竹の子、生にかはらぬ仕樣が祕密」と、口も料理の鹽梅加減。鄕左衞門打笑ひ、「ムヽ山脇三左衞門が世悴なれば、身が爲にも家來筋。親の廟參奇特々々。幼少より他國に育ち、當御代の御風義知らぬは道理。料理は勿論衣類諸道具、すべて無益の費お嫌ひ。上方でも風聞はないか、去年十月高師山のお狩場、身が相役佐野文太左、始ての御供に縮緬の羽織著召れたを、殿がじろ〳〵と御覽なされ、縮緬は風にしぶき面倒な、重ておけろ。是をくれると御意なされ、御手づから下された召替の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其後此事を工夫すれば、お供に參る文太左、縮緬の羽織著めされふ樣がおりない。かねて文太左にお示し合せ、諸家中の見るまへ、木綿羽織を下されしは、美麗御停止とはなく、自ら奢

御覽―朝鮮人來りし時御覽を宿に宿てたり申てもし―何をいふても

松茸―待にかく口も料理―料理と同じく口も鹽梅よくいふ

しぶき―疾吹にて風に吹かれて蹙ちが面倒なれば再び著るな

錦の直垂―宗盛より賜へり
佐々木源淺―高綱の父秀義、身貧なれども平家につかず
おもうし―饗應
むろ―伊豆の室の鰯は名物
圖なし―方圖もない大きい

を止むる一家中への御異見、夫を察せぬ御家中の二番ばへ達のざまを見よ。木挽丁堺丁の役者からつりをとる衣紋付、をのが身の分限も知らず、一がいに殿がお客い〳〵と、勿躰ない蔭言。綾錦を召れてもお大名、綿服を召れてもお大名。齊藤別當實盛が、最後に錦の直垂は著たれ共、源氏を捨平家へ返忠の武士。心は汚れし襤褸同然。又佐々木源藏は二君にも仕へず、襤褸の肩を裙に結び、賴朝の御代を待しは心の錦。今の武士の美麗を好むは。實盛佐々木が遺風を芳しと思召す、此殿の御行跡は下を寛げ世を豐に、賣買を安くせん爲の御儉約。武士は元より町人のそちとら迄、此恩を忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜、酒も數を定られ三盃限り、今日のおもうしも麁相程御意に入。獻立も書に及ず。コリヤ食は赤まじりの古臭いをすつくりと焚かせ、かき立汁に小菜のうかし、向漬はおろし大根鰯、鱠、燒物はむろの酢いり、それも二ツ切、引て古茄子の香の物。扨ひらにはヲヽそれよ、家來に持たせし山の芋、是へ〳〵」と呼出せば、五尺計の山の芋、中間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ、莚を放して舁あぐれば、半兵衞横手を打「扨も圖なし。御當地は芋所か一生の見始。大坂で見世物に致したら、錢銀の摑取。第一お家の吉相。何故と申に、今日は殿の御成、旦那の御出世、追付山の芋から鰡にお成なされふ」

輕薄云々―追從たち〳〵のし上る

うつたり云々―鼓を打たり舞うたりして一人で何もかもやる謡

目八分―息のかゝらぬ高さに持つ（松屋筆記）

殼蜆―蜆の貝ぐるみてうど―十分

と、輕薄ぬらくら口に鱣の、油とろりとのせ掛くれば、「されば〳〵今日の仕合せ。手下の百姓、殿のお成を聞付、身が歸るさの道、料理にせよとてくれしは幸、今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁、隨分切形を出かしてくれ。賴む〳〵」と詞の下、お成門の貫の木の音、「すは殿の御入」と犇けば、郷左衞門も次の間に、袴改めお迎とて出ければ、山脇小七、岡大橋、金田も續いて急ぎゆく。半兵衞料理に心は急く、うつたり舞ふたり身は一ツ、薄刃追取五尺の大芋三寸計切調へ、つゐ皮むいてちよき〳〵。葛醬油の出し鹽梅、煮かたは急ぐ、殿のお顏も拜みたし、座敷口より指覗けば、御城主も股引がけ上段に著給ふ。一間隔てゝ近習の人々、鷹匠犬引列卒足輕、玄關の小庭に居余り、臺所口を押通り、長屋々々を休息場。奥には料理の勝手を急ぎ、主郷左衞門、殿の御膳目八分に持出れば、思ひ〳〵に給仕の作法、お汁がかはるかへ食繼、初獻の肴は鮪の足、一きれ當の引重箱。二獻めも御機嫌よく、お盃がかはつて平の蓋。有がたがための臺引物、定の通り御酒三獻、吸物は殼蜆、思ひの外の無馳走に、上には御悅喜納の盃、坂部もてうど下されて、首尾よく御膳はとれにけり。郷左衞門板本に立はだかり、半兵衞を睨付、「今日の料理は芋一種。でつかい所を御目に懸くるが御馳走。どの樣に切れば

とて、五尺余りの大芋、一寸足らずに切碎く、言語同斷手打にする奴なれ共、他國者といひ御成の時節、屋敷に叶はぬ出てうせべい」と、息詰つたる腹立は、詞少に凄じし。半兵衛膝も動かさず、「是は旦那の御意共覺えず。今日の御料理、隨分切形に氣を付、心一ぱい出かせしと一分自慢。御褒美はなされいで存の外の御叱り。慾じて貴人大人へは何に限らず、斯樣の珍しき物お目に懸けぬが料理のならひ。大名高家は大樣にて、一度お目に觸れられては、澤山に有物と思召、隣國のお出合にも、身が領内には、珍き山の芋有などと、お國自慢のお咄の上、ふと餘國より御所望の時、跡へも先へもいかず、國中を尋ても有合せず、自から殿樣を嘘つきにしてのける。そこを存て常の如くの調味は、旦那へお奉公と存ぜしに、御機嫌に違ひしは身の不仕合。如何樣共御存分に遊ばせ」と、どこやら詞のひつぱなし、殘る所が武士かた氣。郷左衛門口あんごり、「ムゝこりや尤。イヤ尤。あやまり申たゝ。其方が云分眞直に、御前へ申が又御馳走。やれやれゝゝ山の芋で足突た」と、どつと笑へば「早お立」と、お供廻が振出す毛鑓、臺笠立笠大鳥毛、乘物引馬嘶き立、御城内迄お禮の御供。郷左衛門もお輿にそひ、暮ぬ間の御歸城と、氣も夕陽の三重入日影、座敷の仕廻は侍がた、庭の締は中間小者、役め

ひつぱなし―隨せずいひきる所

山の芋で云々―謎にて思ひもよらぬものにやられた

夕陽―せくにかく

鐵枴—鐵枴仙人
ねまり—座る
たくり—せがむ
外良—藥の名、逐頂香
衆道—男色
個せい道—禁制

役めに立別るゝ。臺所には半兵衛一人、庖丁生箸薄刃俎板取片付、煙管くはへて吹息に、鐵枴が皺を延ばしけり。二番ばへ共はらくゝと立寄、「拙者らは郷左衛門組下の弓役共。身は山脇小七郎の舍兄とな。早速の無心。弟の事を賴むも馬鹿らしけれど、前髪姿に神ゝぞ爪先よりぎりくゝ迄打込、毎日くゝしづ心なき玉梓。奉書の代も五百目計。身上を紙に打こんでも、つれない小七郎、兄き是非所望申た。是軍右衛門がねまり申て、手をつかへる。こりやさ拜み申す。吳れ申せ」と、たくりかゝれば、甚藏逸平、「コリヤ半兵衛、おゝとゆつたらむつかしいぞ。外方にも惚手が有。奉書代は愚な事、君に懸つて壹貫五百が外良積んだ此甚藏。弓矢八幡身にくれろ」逸「イヤサ此逸平にくれろふ」と、耳際に嚙付ごとく、惡風吹かけ眼もくらみ、前後忘ずる計なり。煙管も放さず半兵衛大あぐら。半「御城下のならひ衆道御法度。おゝと云へば弟が首が御座らぬはいの」三人「イヤサ當國は女の淫亂は、下々迄御せい道、衆道にはお構なし。三人の内どれへなりと、魂すへて返事せろ」と、もやつく後に小七郎、是迄請し文一抱へ、半兵衛が前に置、半「兄者人の手前も恥しながら、斯う成上は隱されず。數ならぬ私にお執心とは、振袖の身の思ひ出。忝いは山々なれど、獨ならず彼方此方の文の數、無下に返すも情しらずと、請取

立分―義理立を分つ

いき方―氣立てに惚るゝしみしたゝるうしつこく

ては置ながら、一通も封を切らぬがいづれも樣への立分。どなたに隨ふ心もなし。兄半兵衛の存られし事でなし。此文封の儘に御返弁、覺し切て下され」と、男色たてぬく詞の優さ。「其いきかたに猶なづむ」と、しみしたゝるふ取廻せば、半兵衛見かね、「ハテサテ聞分もないかたゞ〳〵。形こそ町人心は侍。拙者が目利で惚手の内へ遣りませう。コリヤ小七郎、裝束せい」と心を目にて知らすれば、少「あつ」と心得うなづきて部屋に入レば、半兵衛多くの文の上書濱、「ハヽァ皆おの〳〵の名書。此一括の上書に、小一兵衛とは誰事、御存ないか」と問ければ、三人共口を揃へ、「其小一めは此屋敷の中間。ヘヽエ慮外な下主めが、遣りおつたは」とゑせ笑ふ。半「イヤそうで御座らぬ。此道に高下はない。其小一兵衛も呼出し、并べて置て念者に頼む」「イヤ〳〵下主め、身などと同座に置奴でない。殊に留主やら頼も見ず。無用〳〵」といふ所へ、山脇小七郎白小袖に淺黄上下、覺悟極て座につけば、半兵衛は取敢へず、肴だいの三方に拔身二口弟の前に置、半「惚手は四人、ほれられ手は弟一人、何方へ進ぜても殘る三人の恨。此兄は他國住居行末も氣づかひ。いやと云はさぬ御所望。歷々のお侍、町人風情に手を下けてのお頼、のつぴきならず。弟に覺悟させての死裝束。表面計の戀慕でなく、末來迄も小七郎不便と思召すな

見ぜせり―尻ごみする
七のゞ―脛を高く襞ぐ
二合半―奴の扶持米
もだい―飯
てきない云々―辛い事でござりますかぶつて―食つても
まちせぬ―ませぬのなまり

らば、此場にて指違へ、人の構はぬ未來での念者若衆。サア弟をやる、何方成共兄弟の契約〳〵」と、三人を睨付る。思ひがけなき拔身の盃、死裝束に吃驚して、三人「へょんだいなし、裙七の圖迄引からげ、一ふりふつて振出すは、戀にこひとや小一兵衛、三人の鼻の先尻付出してかつつくばひ、小「兄御半兵衛樣のお手前も、シャお恥しいべいながら、小七樣にとんと打込、二合半のもり切おだい。喉につまつてぎつち〳〵。てきないこんでごはりまする。今日君がお情をつん出して、未來では拙者めを、お念者になさるべいとは、有難いやら悲しいやら。セ、〳〵〳〵唐がらし、五つ六つかぶつても、こんな熱い涙は出ませぬでごはりまするでごはりまする」と、白刃を取て立よれば、小七郎も引よせて、すはやと見へし刀の中、半兵衛飛入「コリャ狂氣したか小一兵衛」と、二人を左右へ引分る。半「コレサ上方のお旦那、糟味噌汁の御恩にかへたお若衆、爰で死なねば心中が見へまらせぬ。是非に死なせて下され」と、立上るを引伏せ、半「男氣見えた。小七郎に誠の惚手はそち一人。爭ふ者が有てこそ、大事の弟を殺ふづれ。爭手のない若衆。山脇半兵衛が挨拶、向後兄分に賴んだぞ」「ハ、はつ」と悅び小一兵衛「お侍方

ほてくろし―あつかましい
推―粋か

ぞんざい―麁相な奴

しほ―機會

痛い―厳しかく

と同座のならぬ奴めが、武士に劣らぬ魂故、結構なお若衆樣の兄樣とは、忝ないく、冥加ない。手付に一寸ほてくろしい事、御めん〳〵。半兵衛樣も氣をお通し」とべつたり抱き付、紺のだいなし白むくに、黑白推の兄弟なり。岡軍右衛門法界悋氣くわつとせき、「コリヤ下良め。見苦い置おれ」と、肩を取て引のくれば、小「コリヤ何なさるる。ムヽ聞えたお取持の御酒が過たか。ムヽ合點〳〵。流石二腰の御心がけは各別。柔術の稽古遊ばすな。無調法ながらお相手」と、座興にもてなしずつと寄て一當あて、引かづいてうんと投、「ハヽ〳〵〳〵こりや麁相で、ごはりまするでごはりまする」と空とぼけ。甚藏逸平堪られず、一度に寄て胸ぐら摑み、「ぞんざいなる小丁稚め、傍輩をなぜ投げた。返報に砂かぢらせん」と引立る。小「扨々お心がけのよい、お前方もこりや柔術か。どりやお相手」と立拍子、二人が息合はつた〳〵と蹴かへせば、板敷より眞逆樣。小「ハヽ〳〵〳〵こりや又麁相御めん〳〵」といふをしほ、三人ぐず〳〵起上り、「エヽどんな所へ給仕に來て、酒もつて尻踏まれた」と、袴の腰の痛い顏、堪へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞく〳〵小氣味よく、「扨も手際小一兵衛。我は他國便なき弟が事賴むく。今日の料理の御褒美に、二人が事を旦那へ訴訟。權柄晴れて念比さする、其中立

は半兵衛が歌八百万代の神かけて、結ぶ契」ぞ三重

五月雨云々―初め慕はれて後捨てちる（諸國盆踊唱歌）
玉水―山城伏見の南にある里
五つの云々―五穀にて米俵を云
島田―島蠱にかく
鳥飼―取にかく
ちよびかは―はたらく振して忙しそうにして

中之巻

歌「五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田のおとし水」軒の玉水とく〳〵ござれ。繁くござれは名の立に、玉水近き山城の、村は上田に家富みて、庄屋に立ぶ茅屋根も、内溫に下女、立んでつむぐ綿車、手廻りもよくいくはへか、庭に五つのたなつ物、積蓬萊の島田氏、平右衛門といふ火百姓、妻は去年の秋霧と、きへても殘る娘二人。惣領かるに入聟を、鳥飼より呼迎へ、妹千世も大坂に、れつきとしたる聟取て、身の入まひは上田の、田島の世話をやきやめば、萬事限りの俄病ひ。姉のおかるは側離れず。臺所には女子共、「なんと今朝から仕事のはかもいたではないか。ちと休ぶ。お竹お鍋」と呼びつれて、思ひ〳〵に立出る、親のすや〳〵假寐の、隙を窺ひ女房は、心急く奥より立出、「是々臺所に人が獨もない。つれあひ平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟に、大事の病人振捨ての京上り。男共は皆野へ行。エヽ憎い女子共、我見る前ではちよびかはして、一寸立てば早何處へ。大切な主の煩ひ、藥一ッ溫めふ共せぬ。下々には何が成。圍爐裏の下焚付

ぬか。次郎よ〳〵」と呼廻す門の口、駕籠舁据て、「申々、大坂の新靱八百屋伊右衛門様から」と、駕籠の戸明くれば打萎れ、目元しほよる縮緬の、二重廻りの抱帯、涙の色に染かへて、なく〳〵出れば駕籠の者、「慥に御屆け申た」と云捨て歸るも足早成。親の家さへ女氣の、敷居も高く越かねて、佇む有様姉は見付、「ヤアお千世おじやつたか。定て御病氣の見廻ならめ。よふこそ〳〵。何故駕籠の衆留めやらぬ。他外でも有やうにきやくしんがましい。酒一ッ進ぜて去しやいの。それ呼戻しや」といへ共、妹はさし俯き、歎けば共に歎かれて、姉ヲヽ道理〳〵。とふ知らせんと思ひしに、此病ひでは死なぬ。氣のとりにくい舅姑持たお千世、聟半兵衛も忙い時分、聞たり共自由に來る事は成まい、案じさするも不便、沙汰するなとの、病人の氣にもさからはれず、高麗橋の伯母様、常盤町へも知らせぬ。氣遣しやんな京の御典藥に換てから、めつきりと藥も廻り、今朝も粥を中がさに三よそひ。病ひは請取て直すとの、お醫者様の請合は本復もおなじ事。和女の顏御覽なされたら、いよ〳〵父様の病ひはすつぺり直らふ。嬉しい〳〵。お日にかゝりや」と有ければ、千世エヽ父様はお煩ひか、知らなんだ〳〵。何時からの事でござんする」姉ヤ何じやお煩ひ知らぬか。そんなら和女何しに來た。何悲しうて泣ぞ」

きやくしん－隔心

めつきり－キハダッ姿（俚言集覽）

ふじやう―不情
たゞずみ―居る家
風下に云々―風儀を見習ふな
物しやんな―物いふな
いた〳〵しーかはいさう

千「恥かしや又去られて」と、顏押隱しむせび入。姉も驚く顏に血を上一なふお千世、五度三度の聟入嫁入も世に有習とはいひながら、惡ひ事は手本にならぬ。恥かしい〳〵と、口で云ふ計が、恥を知つたといはれふか。和女もかる〳〵三度の嫁入。尤始の男道修町伏見屋の太兵衛殿、心ふじやうに身躰を持くづし、たゞずみもない樣に成果あかぬ別れ。其次は死別れ。互に難はなけれ共、人は和女の辛抱がないゆへに、去られた〳〵と非難付、此度の嫁入も、追出さるゝに間はあるまひ、忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘持た人々は寄合、茶呑咄にも和女の噂。ま一度戻つては親兄弟、人中へ顏が出されぬとは知りぬいて、「火に入骨を碎かるゝ共歸るまい」「チヽ必去られて戻るな」と、念に念をつかふた今度の嫁入。よふ戻りやつた。父樣お聞なされたら、お悅びなされうぞ。お顏見せる折が有ふ。必聲高に物しやんな。して半兵衛が暇の狀取て戻りやつたか」千世「いや跡の月半兵衛殿、父御の十七年の弔ひの爲め、生古鄕遠劣の濱松へ。戻り次第道具に添へ、暇の狀は跡から。先去ねと譯もいはず、お腹に四月唯もない身を、姑御が手を取て、駕籠に引ずりのせ、むごいつらい」と計にて、歎を見ればいた〳〵敷、姉「子の有物を夫の留主、暇くれる姑、心に一物有はいの。伯母聟ながら和女の親分、高

此方の人―姉の夫平六

麗橋貳丁目川崎屋源兵衛殿指置て、直に爰へ突付る仕方も憎し。よい〳〵、此方の人が京からの歸を待て、詰開かせ、大躰で暇は取ぬ。とはいへ世上の女夫中、去るといふ事誰こしらへ、憂目をさせる可愛や」と、歎けば 千「わつ」と泣出す聲、鳴高い〳〵。障子の彼方、父樣の寐入ばな。泣くな〳〵」といひつゝも、つとふ涙の血筋とて、親は泣寄憐れさよ。「平右殿御氣色、今日は如何」とつゝと入、おなじ村の金藏。お千世はちやつと姉の影、見付られじと身を隱せば、金「アヽ隱れまい〳〵。只今堤の茶屋で、大坂へ戻り駕籠の咄で聞た。お千世殿目出度い、去られて戻らしやつたげな」と、口も氣儘のとはうなし、おかるははつと余所よりも、親の聞耳憚りて、「金藏樣たしなましやんせ。聾はなし聲低にいふても濟むこと。千世は去られは致しませぬ、親の病氣を見廻のもどり。奥には父樣すや〳〵と寐てござる。目を醒して下さんすな。ひくう〳〵。おなじくは去んで囉ひたい」と、氣の毒がるほど猶聲高。金「親仁寐てか面白い。なんぼ躁しても慥な事聞てゐます。お千世殿幾度でも去られさつしやれ。彼是の聖達が、踏ひろげた田地でも、百姓の女房には大事ない。おれが持て一夜さも、淋いめはさせまい。去られて戻つた悲いと氣をくさらし、必女房ぶり損ふて囉ふまい。去春囉ひかけた時、おれが方へ

血崩―千行の涙にかく
親は泣寄―親身は憂き目あれば集まる體

とはうなし―途方なしにて無茶

百姓云々―俺のやうな百姓の妻にすゝには一向構はぬ

脇には足云々―他にゐぎても長爲きしまい　入まい―居るまいか　心は奥―心が置かれるにかく

誰かりす―誰が獵すとはなけれども洗げ來る諸と瘠せた肉とかけたり

ござればよいに、惚れかょつた一念、脇に足は留まらぬ筈。入まい〳〵。戻るといふも此鼻に緣が深いからじや。親仁殿にいひ込で、今日からでも我ら請込む。姉御大事にかけて囉ひましよ」と喚けば、二人は死入計。冷す心の奥に手を打、爻「かるよ〳〵」かる「あいあい〳〵」爻「南無三親仁おきられた。金藏が見廻ふたといふて下され。又明日御見廻申そふ」と、歸ればかるは腹も立、「是々去なずと、千世をお囉ひなされぬか」爻「いや〳〵いふても大事の緣組。日を見て申出そう」と、へらず口して立歸る。「父樣お目が覺たか」と、姉が障子をあくる跡より、千世もおづ〳〵指覗けば、夜著にもたれて起臥も、なやみ苦しき老の坂、誰かりすとはなけれ共、落くる肉に顏あれて、見かはす親の顏と顏、堪かねて、千「なふ父樣、お藥あがつて今一度、達者に成て下さんせ」と、思はず知らず聲立て、さめ〴〵歎臥しまろぶ。父も見る目に涙ぐみ、「大事ないつょと來い。つょと寄れ」と膝近く、爻「又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心、居ながら千里萬里も行。況てや一ッ家の內寐ても寐られず、最前より何事も皆聞しぞ。そも我ながら斯くも心の變る物か。五十といふ年の內は、行步心に任せずながら、心は若かりし昔に變らず、氣も强く義理にも引かれ、おのれ重ねて去られたらば、顏も見るまじ物云ふまじとの我もあり

月もより云々―日に〳〵考衰する

去らるゝ―原本さちらるゝ

物まうし―物申さうの略

どまくれ―言ひそこなひ

しが、六十に足踏込んでは、年計よるでなく、月もより日もよつて、病ひにはからまる。身のおとろふる程彌増に案じらるゝは子の身の上。三度はおろか百度千度、去られても、去らるゝに定りし、前世の約束と思ひあきらむれば、悔みもせぬ憎ふもない。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らばそしれ指もさせ、子の不便さにはかへぬぞ」と、老の繰言息よはり、爭半兵衛めは遠劫へうせて留主の内となる。其留主合點。万一うせたり共物いふな顔も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持つて煩ふな。のふ姉下々は野へ往つらん。茶わかいて千世めに中食させてたもれや」と、餘念なき父の顔。姉は悅び「コレお千世、案じた父様の御機嫌日本一。お側はなれず御介抱申しや。嬉しや胸が開けた」と、障子を引立〳〵勝手へ出る。折こそあれ門に、「物もう頼ませう」姉「何方」とこたへ入を見れば、千世が夫の半兵衛。扨こそ緣を切に來た、と思ふ心に口どまくれ、「去狀さま能ふ御座つた」と、云へ共なんの氣もつかず、旅出立のまゝ笠取て、沓ぬぎに草鞋の紐、心も解けて、半「おかるさま、何方も變る事有まい。國元へ參時分は、事急にて報知もいたさず。氣のつかぬ親共、留主の内にも嘸御無沙汰。拙者も無事に遠州より、只今罷歸ります」姉「フウそれはな、御奇特によふお歸りなさるゝ」と、顏を背けて鼻あしらひ。

姉「男共女子共、誰ぞお茶でもあげぬか」と内にいぬ人呼立、むやくし顔の色合を、見て取ながら半兵衛、立も立たれず子細は知らず。互の心隔ての障子さつと明、「姉さま、お藥溫めて」と出るは女房。半「ヤアお千世爰に居るか」を、聞捨て物をもいはずつゝと入、障子をはたと引立たり。半「おかる樣、あれ女房いつから爰に。何ゆへ物は申さぬ」と騷げ共、姉「物いはぬ譯聞たくば、此方の心にお問ひなされ。人の知つた事の樣に、ハヽ〳〵可笑しい事では有」と空笑ひ。取てもつかれず、半「ムウムウ」と計差俯き、とむねつくより詞なし。奥には親のせぐるし聲、父「夜短かで日の長いは、老人の身によけれ共、それも息才で駈け廻る時の事。病ほうけて、日の長いは扨々退屈で暮らし兼る。千世よ、棚な本おろして、何成共讀んで聞せ。かるは何處に。來て聞かぬか。我伽せぬか、うせぬか」と、急しく老の氣もいらだて、姉「あい〳〵爰に仕事しながら、障子隔てゝ聞ます」と、流石半兵衛を捨てゝも立れず。障子の傍に立よれば、半「ヤ親仁樣御病氣か。容躰見たし」と云はんとせしが、不待遇成氣をかねて、詞を留め折を待、共に摺寄聞ゐたる。千世は數多の本取出し、千「伊勢物語ぢんかうき、父樣の傍に有まい。網島の心中もござんする。つれ〴〵平家物語、なふ父樣どの本が能からふぞ」父「姉が讀みさいた平家物語、祇王が

むやくし顔―面倒くさい顔

とむねつく―胸にぎつくり姑の爲と勘づくせぐるし―息苦し

慶劫記―算術書
網島―心中天網島

母の刀自―平家物語一の巻にあり、清盛祇園前を得て祇王を括つる所　あからさまー ちよつと一時

段を聞ふ。讀みやれ」壬「誠に紙を付た所が有」と押開き、文旦「母の刀自なく〳〵又教訓しけるは、天が下に住まん者、兎も角も人道の仰せは背くまじき事で有ぞ。千年万年と契る共、やがて別るゝ中も有、あからさまとは思へ共、ながらへはつる事も有。世に定めなき物は男女の習なり」壬「ほんにそうじや」と讀みさして、我身に當る憂涙、留め兼てぞ泣ゐたる。父も不便に目をしば〳〵、爻「昔も今も人の氣の、移り易き世上の習。コレ姉もきけ。平家物語を千世が身に引比べていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衛、祇王は千世が身の上よ。その清盛が心變つて追出す。憎や清盛、去年聟入せし折から、「不調法な娘を進上致した。氣に入らぬ事あらば、打毆き縛り括つても直させ、末々迄も見捨ず添ふて下されかし。此度共に三度の嫁入。在所は一ッ所どころにて、又歸つては平右衛門二度人中へ頬が出されぬ。娘は氣に入らず共、我を不便と面倒見て、必去つて給はるな」「ヲ、去るまい〳〵。御臨終の折からは、前輿は平六殿、後輿は此半兵衛、眞實の子を持たと思召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛、元は遠州濱松にて、山脇三左衛門が忰。武士冥利商賣冥利、千世は去らぬ氣遣するな」「ア、忝ない」と手を束ね、地頭代官の其外に、一生下げぬ頭を下げし互の契約。物忘れする老の身にも、其時の嬉しさは骨身に

我あ—我はのなまり、きさまはなり

涙—無にかく生れじやう—生れつき

當事—あてこすり

染みて忘れぬ物、若い形して忘れしか。忘れぬ證據、其身は實父の弔ひにかこ付、遠劣へ出かはし其跡で、姑に追出させ、養子の親に我あつみを塗付る不孝者。義理も法も知つた奴か。あれが何の武士の果、鰹節の削屑。人でなしめに緣組んで、あたら娘を捨てたな。「ろくに吟味も爲なんだか」と、死んだ母が、あの世から、恨召されふ口惜い」と、愼み深き堅親仁、惡口交の口說泣。二人の娘も正だい涙、「とかく男に緣のない、生れじやうか」と計にて、聲も惜まず泣居たる。「扨は女房去られて爰へ戻つたか」と、始めて驚く半兵衛、胸に磐石据へたる如く、惘れ返つて涙も出ず、暫し詞もなかりしが、半「エヽ情ない女房。假令一言一言一宿のつき合にも、人の心は知るゝ物。況て足かけ二年の名染、子迄なしたる夫の心、知つても云譯してくれぬか。親仁樣の御立腹、申開くは知つたれ共、我罪を養親に塗付る、不孝者との一言からは、ゆめ〳〵存ぜぬ。我ら去りは致さぬと、申分くる程不孝の上塗。親仁樣につがひし詞、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひをはれ給へ」と、ずはと引きぬく脇指より、おかるは早く縋り付。千世も驚き、「なふ悲しや。こなさまに恨はない」と、障子引あけ走りより、留めても留まらぬ男の力。千「父樣賴み上ます」と、騒げど騒がぬ平右衛門、「お身が居るとは知つての當事。耳にとまつての自害か、ヲヽよい分別。

つちうち—面當て

下さんすか—原本下さんする ぢん未來—靈未來にて永遠 しどなさ—無邪氣さ（俗訓琴）か共—病氣かとも

自害して死んだらば、あれ見よ八百屋伊右衛門夫婦、嫁を憎んで去りしゆへ、子はつらうちに自害せしと、養子に悪名難を付、口々に取沙汰せば手がら〳〵。留るな娘、ぞんぶんに自害めされ。見物せん」との一言に、孝心深き肝をひしがれ、半「ハアそうじや過つた。眞平」と額を擦付身を悔み、「然らば御暇千世も同道、いざお立ちやれ」千「エイやつぱり私を女房に、持つて下さんすか」半「ヲヽ假令死んても身躰も戻さぬ。ぢん未來迄女夫〳〵」千「アヽ忝い父様姉さまも、悦んで下さんせ」と、はや締直す抱帶、さきをにぐつてにじりより、父はは〳〵涙にむせび、父「半兵衛是見や此しどなさ。歸らんと云ふ嬉しさに、親の病ひをか共いはず、悦ぶ顔を見る親の、心の内の嬉しさを、叶はど見せて禮云ひたし。取締のない愚者、伊右殿夫婦の氣には入まい。賴むは其方の心一ッ。親は老病明日知らず、黄泉の底のそこ迄も、心にかゝるは千世一人。明日が日眼塞ぐ共、姉夫婦にきつといひつけ、十廿の金の取やり、いつ何時でも事缺かせぬ。隨分商ひ手廣くして、娘が事を賴入。契約の盃せん銚子〳〵。姉よ酒をきらせしか。親子の中に遠慮はない。酒と思ふ心が酒、燗鍋に水持てこい」と、盃の出る間もこがるゝは子故の闇。引うけ〳〵ずつと干し、父「半兵衛獻そふ」親子夫婦が水盃、さいつさゝれつ汲め共盡き

八功德池―極樂にありと云八つの池　あいにやれ―行ふれよ　つど〳〵云々―千世が姉に色々話す　門火―盂蘭の時亡者の魂を迎る爲門に焚く火、髮は生きて歸るなとの體

ず、呑め共よはぬ水酒盛。不便と思ふ親の氣は、餘りて色に出にける。爰「命があらば又逢はふ。死なば親子の末期の水、未來は八功德池の水、此世に思ひ置事ない。二人ながらおいにやれ〳〵。去らば」と夜著に打もたれ、二たび詞もかはされぬ、親の心に身を恥て、姉につど〳〵云ひかはし、思を陳べて立出る。「暫し」と父は起上り、「姉なふかさねて戻らぬため、親ふて内で門火たけ」忌々しいとは思へ共、親に從ふ焚火の煙、姉「目出度ふ爰から焚きます」と、庭にこがるゝ下もへの、果は夫婦が無常のけぶり、灰に成ても歸るなと、其一言を此世の名殘、留まる名殘行名殘、長き名殘と三重

下之卷

夏も來て靑物見世に水かわく、筵庇に除けられし、日影の千世が勇の家は、新うつほ油かけ町八百屋伊右衞門。淨土宗の願手、了海坊の談義に打込、開帳廻向の世話やき仲間。見世は半兵衞に打任せ、大坂中の寺狂ひ。女房は内外の世話に、五ッも年ふけて、朝から晩迄氣はいらだて、女房「此半兵衞は藏にべら〳〵何して居やる。見世の賣物がしなびる。ヤイ松め、きり〳〵と水打おろ。コリヤさんよ、のりかい物がひあがろがな。と

筵庇云々―靑物しなびる故筵を庇に下す　日影―ひかげものにかく　五つ云々―夫より五つ老たり　いらだて―原本ママ　のりかい―糊つ

りへてたゝんで打盤出して、ちよき〳〵と打て。ヤ其ちよき〳〵で夕飯のおねばきさめ。コリヤ松よ、今日は五日宵庚申甲子が近い。一二また大根のけておけ。ソレさんよ茶釜の下が燃出る」と、商賣が八百屋とて、八百色程いひ付る、口せか〳〵と忙きは、大晦日の生れかや。伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、はしりの竹の子片荷には、獨活生姜青山椒白瓜二ツ。太、歌「是は扨も早い事でごんすよの。おれが戻るは、ても遲い事でごんすよの」鳴「コリヤのらつぼ、今朝卯の刻から内を出て、何時じやと思ふ書下、どこで鼻毛をよまれて居た。旦那しゆの誂へ物、日覆してさへ傷む時、高い物をてんとぼし。商賣のおうごくらはせ、魂に覺させん」と取付けば、半兵衛走り出、「母者人のがこりや尤。コレ太兵衛、何處にのらく〳〵やつて居た。おくび町の笹屋から、竹の子取に矢の使。阿波座堀の丹波屋から、栗おこせといふてくる。朝倉屋からは青山椒、内にはきれる返事に困つた。太義ながら母者人の機嫌なをし、つい一走廻つておじや」太「ハテ私じやとて何ンの惡ひ所にはいつて居ましよ。横町の山城屋から呼こまれ、一ツ三ツ咄したばかり。夫も外の事でござらぬ。此方に誰やら逢ひたいとて、今朝から爰に待て居る、といふてくれとの言傳。私や得意を廻つて來ふ。此方もちよつと往かしやれ」と、誂物を取揃へ、

けものとりへて―取入てかねば―水多くして炊ぎたる飯　二股大根―田子の粘液　のも供物―扨も

のらつぼ―懶惰者原本のらつぼとあり　鼻毛云々―はれた女に馬鹿にされる　ゐうご―天秤棒

此方―半兵衛

荷拵して出て行。半兵衛は山城屋と聞より、「お千世が來たであろ。氣どられまい」と空とぼけ、半「ハア山城屋からは何の用。どりや一すいてかふ」と、はしり出るをむずと執へ、母「息子殿こりやどこへ」平「イヤ山城屋から逢ひたいと」母「ヲヽその山城屋合點成ませぬ。アノぬつけりとした顏はいの。こちと夫婦は何ンにも知らぬと思ふてか。氣にいらいで去した嫁、遠州戻りに在所へより、能くはへて戻つたな。常盤町の從弟が所に預けて置、商賣にかこつけ、間がな隙がな女夫こつてり。おれが知らいでおこかいの。嘸おれが事譏りやつつろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に、隨分と孝行つくし、親には不孝つくしや。恩知らずめ」と聲たよいて喚き居る所へ、靑布子の西念坊、案内なしにずつと通り、「熊野屋の權右樣から先達てのお約束。宗味が石鐘の開眼、麁相な非時致します。講中皆お揃ひ、旦那寺もとふお出、御夫婦ながら只今」と、いひ捨歸るそよくさ坊主、未來賴むはあぶな物。母「アレ親仁殿、熊野屋から呼に來た。早よ往かしやれおりや往かぬ。きり〳〵さしやれ」とつこど聲。親伊右衛門は後生一べん、母「ハレ嘸何を喧い。又してもく半兵衛さへ見れば敵の樣にいふ人じや。世間する若い者、呼に來まい物でもない。少々の事は聞のがしにしやいの」母「ソレ其結構過たから、親を阿房に

ぬつけりーまじめくさつた

宗味が石ー鐘鐘し人か石は刻のあて字なるべし

そよくさーせつかち

つこど聲ー尖聲

しおるわいの。現在おれが甥の太兵衛を指置、あかの他人の此のら殿に、家屋敷遣る此母、邪は少もない」伊「コレかよ、それは誰も知つた事。今更調る事かいの。そのよな腹の立つ時は念佛が藥じや。兎角如來の御方便、修羅燃す和女を、呼に來るも彌陀如來、參るこちとも彌陀如來。機嫌直しや」と宥むれば、母「イヤこち女夫が出てゐて、跡へお千世を呼入れ、留主の間でほたへさす事は成ませぬ。此方一人參つて、私は俄に目が廻ふたと成と、頓死したと成と間に合に遣らつしやれ」伊「コレかよ、たつた今西念坊が見て去んだはいの。此伊右衛門に嘘つけか、ア勿躰ない妄語戒。此中さるお寺で、五戒の割口說聽聞した。三百戒五百戒も、約る所は赤貝に留まるとのお談義。半兵衛が叱らるよも貝のわざ、和女におれが異見するも貝のわざ。一蓮托生の閨のお同行」と、じやれて機嫌を取ければ、「そんならマア此方參らしやれ。此樣な嗔恚の燃る時に念佛申せば、咽にすく〳〵立やうな。心鎭めて跡から參らふ。エ、かててくはへてあた鈍な念佛講。こんな時はめかり聞して延ばしたがよいはひの。ほんに〳〵此方の同行に、氣轉の利いたがひッとりもない」と、怖いめ知らぬ我儘たらぐ、伊「ヲ、そんなら先へ行、跡からおじや。佛法と葺屋の雨は出て聞けと、外へ出れば又有難い事も聞。此度生玉大法事の開

安語―、五戒の一、殺生、偸盜、邪淫、妄語、飲酒を五戒といふ。赤貝―女のものに譬へたり

めかり云々―目利かする（俚言集覽）

葺屋の雨―話に葺屋の雨は内に

帳に、築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事じやけな。こんな事も出にや聞れぬ。アヽ有難い南無阿彌陀佛」と、輪數珠くり〳〵出にけり。半兵衛一言の答もせず、涙にくれて居たりしが、顏ふり上「申母者人、今めかしい申事ながら、武士の釜の水で育ちし此半兵衛、廿二の年から御面倒に預り、一人の甥御を指置、家屋敷商賣共、私へお讓りなさるゝ御厚恩、肝にこたへて空にも存ぜぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別致してこそ、孝行も立世間もたつ。所に此度國本の留主の間に、八百屋半兵衛が母が、嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰有ては、まん〳〵千世めが惡いになされませ、判官贔屓の世の中、お前の名ほか出ませぬ。母の惡名を立て、若い者の人中へ頰が出されませうか。親仁樣にも面目失はする。爰が一ッの御訴訟。少しの間と思召、虫を殺し、美う千世めをお入なされ、其上にて私が、物の見事に去狀書いて隙やります」母「ホヽそこが男のかうけん。貴人高位の娘でも、夫が去るになんと申そ」半「時には千世めが姑への恨もなく、お前を慈悲じやと云はせたい。十六年此方、たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中、假令私が先つても、いか成跡のとひ弔ひ、百萬遍の御回向より、聞入れたとの御一言、智識長老のお十念を、授かる心」と計にて、女房の親

居ては聞えぬ　筑後の川中島―竹本筑後掾の芝居に行ふ川中島四段目に天目山の作物あり（信州川中島合戰）

判官びいき―世人源原を惡んで義經に贔屓する如く嫁に同情して姑を惡くいふもの

かうけん―かうけの轉、かうけは豪家にて權力

のきざりせぬ―離れぬ夫の事
つるし―吊し柿

と我親と、世間の義理と恩愛と、三すぢ四筋の涙の糸、たぐり出すがごとくなり。母はいやりと笑顔して、「ムヽ思ひ合ふた夫婦合。誠らしうは思はねど、嘘に涙は出ぬ物。眞實去るがぢやうじやの」半「ハテお前をだます程なれば、此御訴訟は申ませぬ」母「ヲヽ嬉しい〳〵。おれも鬼には成とむない。必去りやや。間に合いふて欺しやれば、コレ此母が咽笛を、出刃庖丁でちよいじやぞや。母殺すか女房去るか、夫からは其方の勝手次第。ァヽさらりと穢土の苦が脱けた。此世からの生佛とはおれが事。足輕ふ非時に參りましよ。こちや未來迄、のきざりせぬ閨の同行が、さこそ待や焦れて、南無阿彌陀佛〳〵。さんよ其形でつい供せい。ァ南無阿彌陀。松よ、又見世のつるし喰ふな。ァなまみだ」南無阿彌陀佛に取まぜて、ぶつ〳〵いふてぞ出にける。お千世がかさ成五ッ月の、重き身ながら足元も、手もかろ〴〵と帶の下、小褄引あげちよこ〳〵走、千「ハァ久振で内を見た半兵衛樣。今日といふ今日、丁内廣ふ戻つたはいの。ァ嬉しや」と抱き付ば、半兵衛ぎよつとし、「何として戻た。たつた今母が出られた。道で逢ひはせなんだか」千「さればいの。母樣の山城屋へよらしやんして、いつにない門口からにこ〳〵と、「いとしや〳〵。おれが少の思違ひで苦勞させた、今から去なそのいの字もいふまひと、心誓文た

桶な物云々ー何もかも打解けたるさま

てた。娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取らるゝも骨拾わるゝも和女。隨分孝行にしてたも。和女もおれがいとしがる。今お念佛に參る其内に、早ふ戻つて後に逢はふ。早う〳〵」と、とんと桶な物打あけた樣なお心。皆此方樣の云ひなしゆへと、ほんに男の御恩は戴いて居てもあきはない。松よ久しいな。最早どこも蚊が有に、女房主人がなければ、まだ蚊帳の釣手もなし。アノさんが居眠では、給共の洗濯も出來まい。此戸棚のほこりはいの。奥の傷もまだ塞がず、香の物も見廻たし。何からせうやら氣がうろつく。居付た所に居て見よ」と、とんと坐りし茶釜のまへ。湯を沸かして水に成、末知らぬこそはかなけれ。半兵衛とかふの挨拶せず、「コリヤ松よ、只ゐず共藏へゐて、椎茸よれ」と入をのけ、お千世が顔をつく〳〵と見て涙ぐみ、半「エヽ可愛や利發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか。云やる事が皆嘘じや。去ながら昨日もくれ〴〵いふ通り、佛法の端も聞入れ、物の慈悲も知つた人。我蚋をさしのけ他人の身共に、跡式讓る心からは、根からいがまぬ是證據。人には合緣奇緣。血を分た親子でも、中の惡いが有物、乘合舟の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人も有。人界の習慣斯うした物。いとしほなけに根からの惡人でもない母を、和女故に邪見者といはせては、女夫の者が

後生も悪い。母の機嫌よふ一たん呼返し。改めておれが手から去る筈じや」半「エ、イすりやどふでも去らるゝか」半「ハテ肝潰すことかいの。死るは二人が兼ての覺悟。養親にさんもつかず、在所の親の遺恨もなく、エ、流石じや、見事に死んだと未練者の名を取まい爲、母に向ひなんぼの詞を盡くしたと思やるぞ。書置も認め死装束、脇指もあらめの荷へ捲込、此世の心がかりは微塵程もなけれ共、金に詰つて死ぬる心中と一口に云はれふかと、是が一ッの氣がかり」と、わつと泣ばわつと泣、半「こなさんの孝行の、道さへ立ば私も心は殘らぬ」と、夫婦手を取縋り寄り、伏沈むこそ道理なれ。母は念佛の回向より、嫁女夫の願以此功德氣がかり、余所にゆるりと居る空も、見世鎖比にによつと歸り、「なふお千世戻りやつたか。さつきにも云ふ通り、少したりやうげ違ひで、物思はせたいとしやの。ほんの生如來が見たくばおれじやと思や長うもない浮世に、酷いつらいめ見て何にせう。なふ嫌やの。コリヤ半兵衞、はしりの出刃庖丁よふ研がしておいたぞや。ちよいと觸つても釼じやぞ。ァ南無阿彌陀佛〳〵」と、半兵衞に合圖の詞。嫁は知らぬと思ひこむ、是ばつかりは佛なり。女夫は母の機嫌顔、見れば此世の本望と、思へどじやくは雨とふる、涙隱すぞ哀成。母「コレ半兵衞何も忘れたことはないか。日

養親云々―養親の悪評もつかぬ意か

りやうげ―丁稚

はしり云々―流しの出刃にて髮は達約すれば咽喉をつくの謎

じやくは雨―寂にて後に死んで

了ふ事と涙とかけたり（俳言集覽）

五々八々一貫の五ッと八ッと冥の五ッと八ッ時は四月の知死期時

の永い時は得て物忘するものじや。よふ思ひ出しや。お千世泣かずと爰へおじやいの。未已が怖いか。爰へ〳〵」と猫撫聲。千「アイ〳〵お側へ參ります」と、立寄らんとする所を、半兵衛取て突退け、「女房計は親の儘にもならぬ。身が氣に入らぬ、去つた〳〵出てうせい。コリヤさんも丁稚もよふ聞け。半兵衛が女房去つたぞ。向隣丁内でも、母の浮名を立たらば聞事でない。うろ〳〵せずと出てうせい」と、眞顏に睨む目に涙。母「コレ嫁御おりや去らぬぞや。親の儘にもならぬは女夫是非がない。おれを恨と思やるな」と、いへ共何の返答も、泣入〳〵しやくり泣。母「ムヽ其涙はまだ母に恨が有さうな。有なら云や聞ませう」千「イヽエイヽエお慈悲深い姑御に、何ンの〳〵」と詞計にて、かつぱと伏して泣居たり。半「ヲヽおのれが云ふ迄ない、母者人に何ンの恨。口手間入れる面倒な」と、小腕取て門口に引出す。「此身も終に行、後に〳〵」と呟きて、目まぜに宿の名殘の涙、弱る心を見られじと、門口びつしやり見世ぐはつたり。鳴るは六ッかはや初夜か。時も時分も六々に、胸はわけなき五々八々、血死期近づく計なり。あかぬ夫婦の生別、流石の母も挨拶なく、おうゑを立て奥の間の、罪ほろぼしの鐘の聲、善惡照らす御燈の、火を見るよりも居眠る下女、外に見る目も荒布の束、中に隱せし一尺

荒布—あらめ
白茶—知らずにかく
すゝどき—鋭き

四寸、是が冥途の案内者。魂こむる書置箱。地獄へ落ちるか極樂か、末は白茶の死裝束。くる〳〵包む毛氈も、はや紅の血を見れば、死損いはせまいぞと、一心はすはれ共、暖簾一重彼方には、すゝどき母の鉦の聲、胸にこたへて身も慄ひ、踏所覺えぬ差足に、鏝外す手もわな〳〵、そつと出たる門口に、半「イヤアお千世か」千「おいの」半「サア鰐の口を遁れた。サアおじや」と手を引けば、千「マア待て下さんせ。生中一度戻つて、此方樣の口から退くぞ去るぞといはれては、未來迄の氣懸。此門口でたつた一言、去らぬといふて下さんせ」半「ハテ愚痴な事計。今宵は五日宵庚申。女夫連で此家を、去ると思へば能いわいの」半「ほんにそうじや」手に手を取つて此世を去る、輪廻を去る迷を去る、今日は最期の羊の歩、足に任せて 三重

夏—無にかく
杜鵑—半兵衛が養家を去るに寄せたり杜鵑は生んだ卵を鶯に孵して貰ふといふ
去る—申にかく

道行思ひの短夜

歌名殘も夏の薄衣、鶯の巣に育てられ、子で子にならぬ杜鵑、我も二八の年月を、養親に育てられ、子で子にならず振捨て、死に行く身は人ならぬ、死出の田長か杜鵑、同じたぐひの女夫連。肩に掛けたる毛氈は、啼く音血をはく姿かや。覺悟極めし足本も、影

ほのくらき薄曇、卯月五日の宵庚申。死ば一所と契りたる、其一言は庚申、參りの人に打紛れ、忍び出るも商賓の、八百や万を一文字に、半兵衛といふ名にも似ず、只ねぶかくも思ひつむ、わかな心の突詰めて、詞の義理に生薑や。智者は惑はず勇者は恐れぬ生付、流石は武士の種ぞかし。千世も今度が三度目の、嫁菜盛も古くれて、諸事を細な芥子からし、人の云ふ事木耳や、夫の親を手に豆豆、晝夜孝行土筆、仰せ背かぬ給仕へ、氣のとつさかな姑に、せり〳〵弄りたでられて、命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投ふ、今日廿海苔に成らふかと、心は有頂寒天の、いつわつさびと爲もせねば、斯く成蓮でご山椒、何と生姜の身の果を、戯歌いふて返らぬ水蕗の、姑去で殺したと、祭文悪名つけて世の人の、蕨ま生姜お笑止と、悔めば夫は芋茎の涙、半「なふ和女さへ其如く、悔んで給るに此半兵衛、年比日比の御厚恩、送らで死ぬるは人のくず。罰をかぶらん恐ろし」と、酸漿程な血の涙、はら〳〵溢せば走り寄り、手「私も病者な父様を、先へ送るが蓴菜を、却て憂目見せまする。是も何ゆへ相生の、松茸ゆへ」と抱き付、木末に知らぬ松の露、落ちて松露になりやせん。彼一群に聲高く、下向の衆のぞめき歌。見付られじと影隱す。野我が戀路はいとなき三味よ。なんのねもせで待明かす。それじや〳〵、見れ

庚申―叶
ねぶかく―葱
茗荷―若い
生薑―恥にかく
智者云々―論語
芋茎―莖にあり
芥子―小さい
さしげ―大切にする
とつさか―鷄冠
菜と暴逆
せり〳〵云々―斉琴にかけている
ぢめな事
ありのみ―梨
ふ―淵と瓜
わつさび―わつさりと山葵
蓮―筈
蕨―笑ひ
芋茎―隨喜
くず―葛と屑
かぶらん―蒙る
と蕪
冥菜―順
相生―睦き夫婦

ば思ひの雲の帶く、さすぞ盃ならずと一つまいれ。否とおしやるに、こちやも、それじやく。そうさんせそれじやく。しかもよいこの情盛に、ちよきりこつきり小によほの、腰もしなへてやつくるり、くるりやくやつくるりと、ぬめらしやんすは二人がほかに名取川。ヲヽそれ二人と二人が名取川。それじやく」半「それ行過し」と立出て、「今の小歌の一節に、二人と二人が名取川。ヲヽそれそれじやと謠ひしは、己と和女が名取川。辻占が能い此方へ」と、勇むは男の矢竹心。千「アヽ嬉い」と引連て、共に急ぐは女氣の、情するどに人絶て、物しんくたる寺町を、死に行く身も暫くは、爰生玉の馬場先に、法界無縁の勸進所、無明能化の門前に、念佛を使り辿寄る。半「なふお千世、心隨萬境轉と聞時は、心は境界に從つて轉じ變る。和女も千世といふ名を、ふうがく良訓信女と改め、我も八百屋半兵衛を、ろしう禪定門と改め、息の有内より早無き人の骸に入れば、死後の骸の置所も俗縁を離れ、寺の庭でと思へ共、門閉かねば力なし。爰は奈良の東大寺、大佛殿の勸進所。先年了海和尚、衆生濟度の說法を、此所にて說始め、今遷化の跡迄も、我親は講中の第一にて、由緒有所なれば、最期を爰と思ひ寄る。但、望も有や」と問へば、千「なふ死ぬる身に何の望。水の中火の中でも、先の世迄もこな樣と、

にかくねもせで―寢と音にかくならずと―ならずともなへて―しなやかやつくるり―廻る只

生玉云々―生くゝ思ひの我々を化導する所と也

遷化―死去

十方旦那―四方の得意

女夫に成て居る所を、見立て死で下さんせ」と、さめ〴〵歎けば、半「ヲヽ、過分な。此書置にも書く通り、養子に成て十六年此方、十方旦那の機嫌を取、隙有日には町中を振賣し、元は僅の八百屋店、今では人に少々の、金貸す樣に儲け溜ても、つらい日計に日を半日、心を伸す事もなく、死なふとせしも以上五度。恨有中にも和女に緣組、せめての憂を晴らせしに、それさへ添はれぬ樣に成、死ぬる身に迄成下る。由ない者に連添ふて、半兵衛が身の因果、和女に迄ふるまひ、在所の親仁姉御にも、悲しい事を聞すと思へば、此胸に鑢をかけ、肝を猛火で炒る樣な。エヽ口惜い」と拳を握り、膝に押付身を慄はし、涙はら〳〵朝露に、つれて流るゝ計なり。千「あれ又愚痴な事計。在所の父樣姉樣は、こな樣より諦よい。水盃の其上に、門火迄焚かれしは、生て再度戻るなと、私に異見の暇乞。其愚痴な事いふ手間で、早ふ殺して下さんせ。アレ〳〵〳〵三方四方に半鐘がなる鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間に」と、急ぐ最期の玉かづら、夫に纏ひ泣沈む。半「ヲそれよ〳〵山なき悔。最早互に親の事、兄弟の事云出すまい。必和女云出しやんな。いざ此方へ」と毛氈を土に打敷、「なふお千世、此毛氈を毛氈とな思はれそ。二人が一所に法の花、紅の蓮と觀ずれば、一蓮托生頼有。親兄弟への書置も、此狀箱に入置けば、

光明云々―佛の光は十方を照して衆生を救へども殊に念佛者は擁護し給ふと也（觀無量壽經）

おのも―自分も

明日は早々屆くべし。サア〳〵觀念最期の念佛怠りやるな、今が最後」とずはと拔く、一尺四寸親重代、我身を切れとて讓りはせじ。甲斐なき半兵衛が身の果や、と昔思へば手も慄ひ、不覺の涙堰きあへず。心覺の西向に、千世は合掌手を合せ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛彌陀佛の、聲より早く引寄せて、脇指咽に押當る。千「なふ待てたべ待たしやんせ」と、身をすりのけば半兵衛、「待てとは未練な。刃物を見て俄に命惜なつたか。卑怯者め」と睨付れば、千「いや〳〵未練も卑怯も出ぬ。今の囘向は我身の囘向、可愛やお腹に五ッ月の、男か女か知らね共、此子の囘向して遣りたい。嬉しやまめで產だらば、何樣して育てふ斯うせうと、案じ置は皆あだ事。日の目も見せず殺すかと、思へば可愛ふござんす」と、かつぱと伏して泣入れば、男も聲をすゝり上、「己も何ッの忘れふぞ。若云出したら和女の泣きやらふ悲しさに、默つて居た」と計にて、一度に「わつ」と聲をあげ、前後正躰泣叫ぶ。おのも翼を竝べながら、人の最期を急ぐ成、八聲の烏も告渡れば、半「サア〳〵夜明に間がない。明日は未來で添ふものを、別は暫しの此世の名殘」十念逼つて一念の、聲諸共にぐつと刺す、咽の呼吸も亂るゝ刃、思ひ切つても四苦八苦、手足をあがき三重身をもがき、卯月六日の朝露の、草には置かで毛氈の、

郡内―甲斐の郡内より織出す絹織物

上に無き名を留めたり。年は三九の郡内島、血汐に染みて紅の、衣服に姿掻繕い、妻の抱帶を二ツに押切、諸肌脱いで我と我、鳩尾と臍の二所、うんと締ては引くゝり〳〵、脇指逆手に取持て、二首の辭世にかく計。「古を捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消へぬ名こそ惜けれ」「はる〳〵と、濱松風にもまれ來て、涙に沈むざゝんざの聲」三國一じや。我は佛になりすます。しやんと左手の腹に突立て、右手へくはらりと引廻し、返す刃に笛掻切り、此世の緣切る、息引切る。晨朝過の勸進所、目すり〳〵〳〵門番が見付て、「心中ヤレ心中。死んだ〳〵」と呼はる聲、吹傳へたる濱松風、枝をならさぬ君が代に、たぐひ稀なる死姿、語りて感ずるばかりなり。

三國一―嬉しい事

晨朝―卯の刻

近松淨瑠璃集下卷終